Himeji City Science Museum
姫路科学館 サイエンス トピック
Apr. 20. 2020. No.552

# 科学の眼
まなこ

発行:姫路科学館（〒671-2222 姫路市青山 1470-15 電話:079-267-3961）
https://www.city.himeji.lg.jp/atom/

**生物シリーズ**

シロチョウと名のつくアゲハチョウのなかま

## ウスバシロチョウ

*Parnassius citrinarius* Motschulsky,1866

姫路科学館　館長　髙橋　康範

### ■ウスバシロチョウ

白色半透明の翅(はね)を広げた大きさは 26～38㎜で静止するときには翅を 180 度開きます（写真 1）。地上 1～2ｍぐらいを常にゆるやかに小刻みに翅を動かしながら飛んだり、林間や草地の上を滑空したりします。飛んでいるときは、スジグロシロチョウなどのシロチョウ科(写真 2)と間違うくらいに紛らわしいのですが、ウスバアゲハとも呼ばれるアゲハチョウ科のなかまです。

北海道、本州、四国に分布し、年１回の発生で、早い所では４月下旬から羽化が始まり５月が最盛期となります。太陽が出ているときに活動する個体が多いですが、早朝と午後の１日２回の活動のピークが見られます。気温の高いときのみ行動するというのではなく、生理的な要因があると考えられています。ネギやアザミ類などを好んで吸蜜します。日中気温の高いときに産卵し、食草近くの枯れ葉や枯れ枝、小石などに 1～数個ずつ産み付けます。卵のまま越冬し、食草が葉を開いたころに孵化し摂食を始めます。40 日～60 日の幼虫期間ののち蛹となり 1 週間ほどで羽化します。

**写真１　ネギの花を訪れたウスバシロチョウ**

**写真２　吸水するスジグロシロチョウ**

## ■食草は有毒植物

食草はケシ科の植物のムラサキケマン(写真 3)やヤマエンゴサク、エゾエンゴサクなどでいずれもプロトピンというアルカノイドを含み、誤食すれば嘔吐や・呼吸麻痺・心臓麻痺などを引き起こすことがあるためと食用としないよう注意が必要です。

食草の一つ、ムラサキケマンは 20～50cm の草丈で茎が少し角張り、ややくさび形の分裂した葉がつき、花は紅紫色、時には白色または一部白色になることもあります。
花期は 4～6 月で、北海道から沖縄まで分布しています。

近年、姫路市北部ではウスバシロチョウが見られなくなっており、シカによる食草の食害がその原因と考えられています。

写真 3　食草のムラサキケマン

## ■なかまのチョウ

国内では北海道に近縁のヒメウスバシロチョウがおり、ウスバシロチョウが北海道の南半分に多く分布しているのに対して全域に広く分布していて、翅を広げた大きさは 26～37mm で雌はウスバシロチョウとの区別は難しいです。

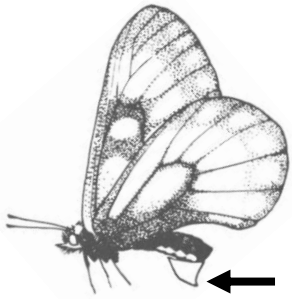

図 1　雌の腹部についた交尾付属物

北海道大雪山系には、国の天然記念物であるウスバキチョウが見られます。黄色半透明の翅を広げた大きさは 24～32mm で後翅には赤色斑があります。標高 1700m以上の高山帯にすみ、6 月上旬から羽化を始め 8 月中旬ごろまで見られます。1 年目は卵で、2 年目は蛹で冬を越し、3 年目にようやく羽化をします。

これらのなかまに特徴的なのが、雄が分泌物を出して交尾後に雌の腹部に袋状の交尾付属物(図 1 の矢印部分)をつけることです。このことにより雌は他の雄と交尾できなくなり、交尾した雄の遺伝子が確実に伝えられていくことになります。

また、交尾付属物については、日本固有種であるギフチョウ(写真 4)にも見られます。翅を広げた大きさは 27～36mm で黄色と黒色の縦縞模様が特徴的です。3 月下旬から羽化が始まり、4 月上旬～中旬が最盛期となります。年 1 回の発生で春のみ現れるので“春の女神”とも呼ばれています。ウマノスズクサ科のカンアオイのなかまを食草としますが、人の生活様式が変化するとともに近年、その生育できる里山が減少し、姫路市周辺で見られるギフチョウの数も少なくなってきています。

写真 4　ギフチョウ

**参考図書**　(1)原色日本蝶類生態図鑑(Ⅰ)　　保育社　　福田晴夫　ほか
(2)チョウ①　　保育社　　渡辺康之
(3)日本の野生植物　草本Ⅱ離弁花類　　平凡社　　佐竹義輔　ほか